AJEQ NEWSLETTER

2011年秋の号

©日本ケベック学会 Association japonaise des études québécoises　　第2巻　第3号　2011年10月19日発行

〈秋の号の内容〉

1　2011年UNIFA/AJEQ大会を終えて（小畑）
2　セッション報告（伊達、小倉、立花）
3　研究会、発表、講演報告（竹中、立花、伊達、小倉）
4　特別寄稿文「モントリオールにおける日本文化―2011年3月から初秋にかけて」（廣松）
5　お知らせ、編集後記

2011年UNIFA/AJEQ大会を終えて

本年度のＡＪＥＱ大会はＵＮＩＦＡとの共催で、いつもより大規模なものになりましたが、各理事・各会員の協力のおかげで、多くの稔りとともに無事終了することができました。私自身は6月より9月にかけて入退院を繰り返して治療に専念させていただき、何もお手伝いできず、申し訳なく思っております。この場をお借りして皆様にあらためて感謝申し上げます。思えば、ダニー・ラフェリエール氏の来日も、昨秋にモントリオールで会談して、翻訳や招聘について話し合った時にはまだ「計画」にすぎないものでした。その後、会長職代行を快く引き受けてくださった立花副会長や小倉副会長らの尽力により実現にいたり、非常に嬉しく思っております。正直なところ驚いているくらいです。おかげさまで、9月中旬に一通り治療を終え、大会に顔を出して、盛況ぶりを拝見することができました。今後とも全会員力をあわせてまだまだ若いＡＪＥＱを発展させていけるよう願っております。（小畑精和）

2011 年10月14日　AJEQ

謝辞

今回の大会のために、ケベック州政府在日事務所、およびフランス大使館にはひとかたならぬご恩顧を賜りました。また本年度より、シャロン州政府代表が学会顧問をお引き受けくださることになりました。こちらをもちまして、AJEQ一同からの謝辞とさせていただきます。

セッション報告ー開催と進行

UNIFA/AJEQ大会は、9月29日より10月1日まで、東京恵比寿の日仏会館の会場で開催された。AJEQ会員が直接参加した三つのセッション、研究会、およびパネルは1日に行われた。海外からは、ケベック州政府在日事務所のご尽力により、ミシュリーヌ・ミロ氏とダニー・ラフェリエール氏の招聘が実現したほか、韓国ケベック学会（ACEQ）からリー・ジソン氏、フランス政府による招聘のおかげでリー・カヤ氏と辛　玉根氏、北京からドン・チャン（董強）氏、そしてソウルからピエール・マルチネズ氏らを迎えることができた。

第1セッション
「ライシテとグローバル化」

三浦信孝氏（中央大学）の司会のもと、まずミシュリーヌ・ミロ氏（ケベック大学モントリオール校）が「ライシテと宗教的マイノリティ—政教分離から承認の原理へ」と題された講演を行なった。ライシテの要素的理解を提唱し、国際比較のための地平を提示すると同時に、政教分離は必ずしもライシテの究極目的ではなく、また政教分離だけでは十全なライシテの実現には不十分であることを明らかにした。ターブル・ロンドにおいては、伊達聖伸（上智大学）が「和辻哲郎に見る宗教への文化的アプローチと『ライシテ』」というタイトルで発表を行ない、宗教を文化として扱う和辻の姿勢に、近代日本のライシテのあり方がどのように表われているのかを探ろうとした。続いて、辛　玉根氏（高麗大学ソウル）の発表「韓国における多文化主義とライシテ」では、韓国社会ではまだライシテという形での問題の定式化はなされていないが、ライシテの問題系は、文化多元主義が進行するなかで考えていかなければならない課題であるということが述べられた。（伊達聖伸）

第2セッション
「ケベックの移民文学」

まず韓国ケベック学会長のリ・ジソン氏が「狭間の文学」と題する発表でレジーヌ・ロバンの『ラ・ケベコワット』を、続いて廣松勲氏（モントリオール大学、東北大学）が「根付きの謎」と題してエミール・オリヴィエの死後出版の小説『ラ・ブリュルリー』を考察し、最後に山出裕子氏が「キム・チュイにおけるエスニック・アイデンティティとヴェトナムの記憶」において、この作家の『小川』を取り上げた。1980年代以降、間文化主義政策のもと、ケベックには多くの移民作家が住み着く。今回扱われた作家たちを見てもわかるように、ユダヤ系のヨーロッパ出身者、ハイチ系、ヴェトナム系のボートピープルなど、その出自はじつに多様である。パネルディスカッションでは、これらの作家たちを惹きつけるモントリオールという都市の魅力について意見が交わされた。続いて、移民文学の主要なテーマでもある自己同一性と他者性の問題が取り上げられた。ケベック女性になりきれず、増殖的・分裂的な自己をエクリチュールに反映させるロバン、変容し続けるアイデンティティを浮き彫りにするオリヴィエ、北米的な「匂い」をまとうことによってホスト社会に同化しようとする自己の分身を描き出すチュイについて、活発な議論が展開された。（小倉和子）

「アイデンティティと言葉」

４つの発表がなされた。立花英裕（早稲田大学、「ダニー・ラフェリエールとアイデンティティの戯れ」）は、小説『吾輩は日本作家である』を中心にして、差別的な諸表象を逆手に取って小説世界を築いていく手法を論じた。リ・カヤ（成均館大学校ソウル、「マリーズ・コンデに見るアイデンティティの探求」）は、カリブ的人間像を描くコンデの作品世界を、エドゥアール・グリッサンのリゾーム的アイデンティティを参照しながら論じた。董強（ドン・チャン、北京大学、「アイデンティティと翻訳:ミラン・クンデラ作品をめぐる考察」）は、中央ヨーロッパ文化に自己を位置づけるクンデラの基本姿勢を明らかにした後、翻訳の忠実さにこだわる作家と、翻訳作業が内包する裏切りの豊さを捨てきれない（られない）翻訳者を対比しながら、問題への視点をずらしてみせた。ピエール・マルチネズ（国立ソウル大学、「他者の眼差しを介したアイデンティティの構築:韓国へのフランス人旅行者が語る韓国と日本」）の発表は、共同研究の成果で、18世紀末から1930年までのフランス人紀行文を通して、韓国と日本のイメージを分析するものだった。サイード的な視点と言語学・統計学的な分析を組み合わせようとする意欲的なものだった。以上4つの発表を俯瞰的に見れば、それぞれに対象も視点も大きく異なることは否めない。ラフェリエール論では、客体的に押しつけられる諸表象を解体していく中で新たな言語的自由を追求するケベック移民作家が取り上げられ、コンデ論では、クレオール社会の文化的伝統を継承するとともに個としての自由をも求める作家が扱われ、クンデラ翻訳論においては、翻訳による作品変容にアイデンティティ的危機を見る作家の姿勢が問われ、フランス人旅行者の紀行文においては、テキスト分析を通して表象的アイデンティティを結像させることの困難に焦点が当てられているように見えた。こうした研究の相違は決して悪いことではなく、それどころか今日のアイデンティティ研究の豊かな広がりを示している。会場からは、文学の「創造性」と社会科学との関係をどう考えるべきかという難しい質問がなされた。社会学の立場から文学を論じた研究の代表的なものにピエール・ブルデュー『芸術の規則』があるが、文学言語は作家のハビトゥスに還元されるものではなく、文学と社会科学をどう相関的に捉えるかは、なおも開かれた問として残っている。今回のセッションは、ケベック研究という枠を超えて、ジェラール・ブシャールが述べたような比較研究的視野の重要性をあらためて痛感させる有意義なものであった。（立花英裕）

研究会、会員の発表、講演会

メインホールでセッションが進行している間、日仏会館の6階ではAJEQ会員による研究発表と緻密な討論が行われた。以下がその報告である。また、前日9月30日には、古地順一郎会員（UQAM）がUNIFAセッションに参加し、発表を行った。その報告もここに合わせて載せた。一方、ケベック州政府の招聘で来日されたミシュリーヌ・ミロ教授およびダニー・ラフェリエール氏を招き、大会の前後には各大学が講演会を開催した。ここには。10月3日の両者の講演報告を記した。

研究会

第一報告は、仲村愛会員（明治大学大学院）による「多文化社会における正義―カナダ連邦政府の多文化主義とケベック州のインターカルチュラリズムの対立を事例として―」である。連邦政府の唱える多文化主義を再整理し、他方『ブシャール=テイラー報告』(2008年)を基調として、”accommodements raisonnables”の意味するところを、ケベックの文脈に沿って分析。さらに多文化主義の対立概念としてのインターカルチュラリズムが再解釈される。ケベックにおける「正義のありかた」が問い直されている点で、これは普遍的な問題提起であり、かつ意欲的な研究発表であった。第二報告は、山口いずみ会員（津田塾大学）による「多元的アイデンティティに関する一考察　―中国系モントリオール市民を事例に―」である。ねらいは、モントリオール在住の中国系カナダ人が、個人的・社会的に多元的要素をかかえながら、自分たちのアイデンティティをどのように認識しているのか、その理論化に置かれた。現地での社会調査にもとづいているだけあって、報告はデータの豊富さ・独創力・実証性ともに優れた内容だった。この中国系市民のアイデンティティの特質を独自に類型化し、結論としてかれらが相互排他的な関係にないことを示したもの。説得力豊かな報告であった。（竹中　豊）

古地会員の発表

「ケベック州の移民統合政策とマイノリティ：政府行動計画実施委員会(1981-84年)を中心に」と題された同発表は、パネル「アイデンティティと多様性」においてなされた。1980年代前半に実施されたケベック州政府の移民統合政策は、移民とエスニックマイノリティに向けた初の総合的な政策であり、その推進機関としてComité d’implantation du plan d’action à l’intention des communauté culturelles（CIPACC）が設立された。しかし、エスニックマイノリティの指導者たちが政策推進の積極的な役割を果たせなくなり、CIPACCは失敗に帰した。発表は、政府関係資料その他を用いて、挫折の原因を明らかにした。ケベックの移民研究は日本ではまだほんとんと手がつけられていない領域であり、その意味でも大変貴重な研究である。（立花英裕）

ラフェリエール氏の基調講演「アイデンティティと言葉」

「文学は、ある特定の地域の産物であることに甘んじるものではなく、普遍を目指す」。力を込めてラフェリエールはこう語る。他方で、彼の文学が彼自身の生い立ちの中で準備されたこと、特に育ての親の祖母や叔母たちが大きな役割を果たした、とも明かす。この二つは矛盾しているようにも見えるが、彼の中では明らかに一つのもので、筆者なりに解釈すれば「日常生活」にこそ文学作品の生地があり、そこにおいてこそ普遍的な言語が養われるのだということではないか。ラフェリエールは、彼の作品全体を「アメリカ的自伝」と名付けている。そこで言う「アメリカ」とは合衆国ではなく、米大陸全体であり、とりわけハイチにこそアメリカ的なものが見出されるという趣旨だった。巧みな話術とユーモアで聴衆を惹きつけながら、彼は文学作品は必然的に特定地域、特定の人間や社会問題を描くが、それが特定の読者だけを喜ばせるのではなく、世界の読者を惹きつける言葉になってこそ真の文学になるのだと教えてくれた。会場からも熱心な質問があり、笑いの溢れる濃密な講演であった。（立花英裕）

ミロ教授、上智大学で講演

10月3日、上智大学においてミシュリーヌ・ミロ教授（ケベック大学モントリオール校）の講演会「宗教の多様性をどう教えるか――ケベックの『ライシテ』体制における宗教教育」が行なわれた。ミロ教授は、教育のライシテの方向性を定めたプルー報告書（1999年）の執筆者のひとりで、ケベック州政府が推進する「倫理・宗教文化」教育の成り立ちと実情に詳しい。講演会では、この教育がたんなる知識教育にとどまるものではなく、対話の実践を通して他者に対する寛容と尊重の精神を学ぶものであって、啓発された市民の育成が目標に掲げられていることが述べられた。そのうえでミロ教授は、ケベックの宗教教育の特徴をさらに明確にするために、フランスおよびイギリスとの比較を行なった。フランスでは、「宗教的事実の教育」なるものの重要性が認識されてはいるが、独立した科目の創設には至っていない。イギリスでは、多様性と宗派間の対話に価値が置かれているが、そのときの宗教は「共同体」としてとらえられている。これに対してケベックでは、移民の宗教が「個人」の宗教とされる傾向が強い、とミロ教授は指摘した。30名余の聴衆のなかには日本の宗教教育研究者もおり、講演の後、活発な質疑応答が行なわれた。（伊達聖伸）

ラフェリエール氏、立教大学で講演ー「ハイチとケベックのあいだで書くこと」

ハイチに生まれ、23歳でモントリオールに移住したD．ラフェリエール氏の経歴と著書について小倉が簡単に紹介したあと、澤田直教授からの質問に答えるかたちで対談が行われた。話題は、1）故郷ハイチと現在住むケベックが氏の作品の中でどのように描写されているか、2）アメリカ大陸を舞台にした一連の小説「アメリカ的自伝」におけるフィクションの意味、3）クレオール主義にたいする氏の立場、4）さらにはヴォドゥ教にまで及んだ。パーフォーマンス豊かな氏の話を伺い、会場からの質問を受け付けると、あっという間に予定の時間が過ぎ、参加者たちにとっては忘れがたいひとときになったにちがいない。終了後、イラスト入りのサインをもらった学生たちの嬉しそうな様子が印象的だった。（小倉和子）

会員特別寄稿

モントリオールにおける日本文化：2011年3月から初秋にかけて

2011年3月から初秋に至るまで、「日本」という言葉がケベックのメディアに現れる際には、ほとんどの場合東日本大震災や福島原発問題といった未曾有の災害に関連する形においてであった。この状況は今後も継続することになるのだろうが、ただそんな中にあっても（あるいは、そんな中にあるからこそ）、今年はモントリオールにおいて日本の文化が大いに注目された年でもあった。特に夏から初秋にかけての各種フェスティバル開催の時期には、私見では例年以上に、日本の作家や芸術家たちの名前が頻繁に登場したように思う。

特に今年は、小説家井上靖の作品が耳目を集めることになった。映画『わが母の記』と劇作『猟銃』である。まず、2011年8月末には、自伝的小説『わが母の記』（1975年）を原作にした同名の映画作品（原田眞人監督・脚本）が、モントリオール国際映画祭にて最高賞のグランプリに次ぐ「審査員特別グランプリ」を受賞した。本作品は、父の死後、老いて記憶の薄れゆく母と生活を始める主人公の小説家が、母という存在や家族の絆を見つめ直す様子を描いた作品である。撮影は世田谷にある井上靖邸や、出身地の伊豆や沼津で行なわれ（出生地は北海道の旭川市）、ノーベル賞候補ともなったこの作家が生きた昭和の情景も巧みに再現されている。

本作の受賞後の興奮が冷めやらぬ9月上旬には、1949年に発表された恋愛心理小説『猟銃』の劇作が、映画『レッドヴァイオリン』や『絹』の監督としても知られるフランソワ・ジラール演出で、Usine C劇場において上演された（日本語での講演で、フランス語字幕付き）。この劇場のあるCentre-Sud地区は富裕層の住む地域ではないものの、モントリオールにおいては最も芸術活動の活発な界隈の一つであり、また非常に活気のあるゲイ・ヴィレッジも存在する。本劇場は、古い工場の内部を劇場にしたものであり、巨大な煙突の残るその建造物は、一見すると内部に劇場が存在するとは思えないような外観である。さて、本作『猟銃』は、すでに2010年10月に同劇場にてマリー・ブラッサール主演で上演されているが、今回が初舞台の女優中谷美紀を主演に据え再演された。物語は、或る狩猟雑誌に「猟銃」という散文詩を発表した小説家「私」のもとに、一人の読者から手紙が届く場面から始まる。三杉穣介と名乗るこの実業家は、詩の中の孤独な猟師に自分自身を見てとり、「私」に自らの13年間に渡る不倫関係とその顛末について伝えることを思いつき、三通の手紙（妻、愛人の娘、愛人からの手紙）を「私」に送り届ける。秀逸な構成を持つ小説版ではこの三通の手紙の文面が大半を占めるが、劇作版ではこの三者の言葉を中谷美紀が一人三役で演じ分ける。本作は、2011年10月から11月にかけ、日本各所にて追加公演を含めて上演中である。いずれの作品もケベックでは新聞記事などにおいて最上級の評価を受けていたが、特に後者の劇作『猟銃』に関しては非常に多くのメディアでも取り上げられた。

モントリオールと日本との文化交流は、2011年11月中旬に上演予定のルーシー・グレゴワールと舞踏家大野義人とのダンス・コラボレーション「In Between」においても続けられる。今後もこのような日本文化の異文化接触の現場に足を運び、ご報告をできたら幸いである。（廣松　勲）

・参考：「『猟銃』の記者会見について」（AJEQ資料集）：http://ajeq.blog.so-net.ne.jp/2011-07-09

ニュースレターでは、会員からの特別寄稿文を募集しています

年3回発行されるAJEQニュースレターでは、随時会員の皆様からの寄稿文を募集しています。皆様がお持ちの貴重なケベックに関する最新情報を、他の会員の方にもお届けしましょう。今季号では、モントリオール在住の廣松勲会員が、2011年前半にかけて、日本文学の映画化がケベックで話題を呼んだことを記事にしてくださいました。文化、社会、政治の分野を問わず、日本のケベック研究者にとって興味深い話題がありましたら、是非皆様も記事にして、ニュースレター担当の方へお送りくださいませ。（加納）

編集後記

2011年10月、日本はますます深いところで揺れ続けています。しかし、今年の大会は国と領域を超えたAJEQの結束を再び見せてくれました。多くの人の隠れた献身と友情に支えられて、大会は実現し、成功しました。今回お名前をニュースレターに載せられなかった会員諸氏には、この場を借りまして篤くお礼申し上げます。今後とも、AJEQニュースレターへのご愛顧を賜りますことを。（加納）

日本ケベック学会（AJEQ）とは

「日本ケベック学会」（AJEQ）は、日本でのケベック・フランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流などを振興し推進する学会です。ケベックやフランコフォニーにご興味のある方の参加をお待ちしています。

学会活動の詳細は、以下のホームページとブログをご覧ください。

HP: http://www.ajeqsite.org/index.html
ブログ: http://www.ajeqsite.org/index.html

日本ケベック学会（2011年10月～）

・主要役員
小畑精和（会長）
立花英裕（会長代理）
小倉和子（副会長）
池内光久（監事）
曽田修司（監事）
C. Y. シャロン（顧問）
・広報HP担当
加納由起子
小松祐子
安田　敬
宮尾尊弘

AJEQニュースレター
年3回発行
発行人・小畑精和
編集人・加納由起子
日本ケベック学会